ショートセッション要旨

『日本霊異記』中巻第十縁における脚色と改変
～「自土」の視点

孫（ソン）　世偉（セイ）（カリフォルニア大学ロサンゼルス校博士後期課程、
早稲田大学リサーチフェロー）

『日本霊異記』中巻第十縁「常に鳥の卵を煮て食ひて現に悪しき死の報いを得る縁」は、大筋の内容において、『冥報記』巻下の「隋冀州小兒」と大変類似しており、霊異記の編纂に際して、原話から強い影響を受けたものだと、すでに多くの先行研究が指摘したところである。ただし、両者の内容を照らし合わせると、細部において色々な改変と脚色が行われていることが認められる。これら意図的に行われた改変は、該当説話を単に先行文献の焼き直しとして収録するのでなく、編者景戒の意図に添い、「日本国」における出来事として語られるべく、「自土」である日本の事情に、よりふさわしいものになるべく脚色されたではないかと思われる。

「何すれぞただし他国の伝録に慎みて、自が土の奇しき事を信恐りざらむ」という編集方針を掲げ、原話の地名、人名、時代背景などを日本のものに置き換えるのみならず、説話内容をより受け入れやすいものにするため、細部に変更が行われていることが確認できる。

例えば、事件の舞台を日本にあるとの信憑性を強めるため、中国にあった無名の邑を、和泉国に「実在」した村に仕立てあげ、さらに記紀や風土記で頻繁に見られる「地名起源説話」に類似したモチーフを持ちこんでいる。「自土の奇事」としてこの説話を語る際、こういった特徴を有効に際立たせたのではないかと思われる。

さらに、話の権威性を高めるため、原話では助命はされているはずの主人公を「唯一日を逕て死ぬ」とし、殺生に対する応報の即時性を強調する。のみならず、罰の厳しさも増強され、同書の他の殺生のケースにおける厳罰と立場が近い。末尾に原話にない編者の見解が添えられ、史伝における「賛」に類似した説話への評価と価値判断を、あえて経典を引き丁寧に教訓色濃く仕上げている。これもやはり日本霊異記全体を通して見られる姿勢であり、編者景戒の方針に従ったものであると指摘しておきたい。

志賀直哉文学における「リズム」の概念と現象学的文芸論の可能性

ZABEREZHNAIA Olga（モスクワ大学大学院修了）

本稿は第一に、白樺派の代表的な作家、志賀直哉の小説における「リズム」の現象を考察する。志賀は直接自分の「リズム」を作品の中に生かしていくことが創作の目的であるとしていた。「リズム」は人間の血脈から作品の原動力となり、ほとんど生理的なリズムという意味になるといえる。

第二に、志賀の「リズム」論を解明できる方法として、現象学に基づいた文芸評論の可能性を考察する。現象学の批評は作家の個人的な意識を分析し、作品の独特な世界を生かす方法を探り、作家の志向的経験に基づいた意識パターンを指摘することで志賀文学研究に適切な理論と考えられる。現象学の成果を受け活躍していたジェネバ学派の批評論をはじめとして志賀文学の分析に適用することによって、リズムの概念と結び付ける可能性を探る。

その結果として以下の点が明確となった。

志賀のテキストでは概念的パターンより無概念的パターンが圧倒的に多い。その例の一つは、「気分」のパターンである。作家の「気分」は単純な単語（愉快、不愉快、好意、親しみなど）で表される。それは、作品世界が作家の「リズム」によって展開されているためであり、内容は「リズム」の順調な流れと中断の連続からなり、文章では順調な時は「愉快」、中断は「不愉快」と表記されている。

志賀の文章の魅力は観念的なものではなく、その「意識」、言い換えれば周囲の現実から把握される「リズム」がヒントを与える。「暗夜行路」の主人公時任謙作の内的世界の主な特徴は「空虚」（意志、思想、希望の無さ）であるため、彼は、周囲の現実を自分の内的「現実」に入れ込むことができる。そのおかげ

で読者も作品の中心的存在（謙作）を通して作品の現実がわかり魅力を感じる。

しかし、その魅力の理解には読者から十分な直観的な働きが要求される。その点に関してローマン・インガルデンの読者論が可能性を持ち、特に日本の読者が西洋の読者より志賀の文章を「具体化」でき、鑑賞できる現象の解明に結び着く点で志賀直哉研究で使うべきと考えられる。

日本語教材となった近代日本文学
── 講談速記を中心に ──

ALBEKER András Zsigmond（京都大学非常勤講師）

西洋の速記術は、日本ですでに幕末・明治初期に知られており速記術に接した人もいたようである。また、英和・仏和辞典や西洋文化を解説する書物に速記の説明・紹介も見受けられる。明治時代に入ると、速記の翻案も試みられ、やがて1882年に田鎖綱紀が「日本傍聴記録法」を『時事新報』で発表するに至った。その後速記記号の改良とともに速記の実用化が始まり、演説・講演・会議録・裁判記録の他に落語と講談の記録も行われていた。講談速記の初めは三遊亭円朝演述の『怪談牡丹燈籠』（1884年）である。この速記本は高評を得ており、講談落語速記ブームを巻き起こしたのである。

西洋の日本語研究者が日本語文典・テキスト集などを執筆・編纂する際に、昔話・演説速記・小説の抜粋もしくは全文をローマ字に転写して日本語のサンプルとして掲載した。また、口語の良い実例として講談落語速記、特に三遊亭円朝の作品にも注目した。選んだ理由としては、地の文まで口語体で書かれている小説の中で円朝の作品が最も優れているという点が挙げられている。1884年から明治末まで出版された話し言葉の教材の中では『怪談牡丹燈籠』『塩原多助一代記』の抜粋が英国のAston、Chamberlain、Weintz、ドイツのLangeの教材に掲載されており、『蝦夷錦古郷の家土産』『明治の地獄』の全文がドイツのLangeとPlautによって採用されている。しかし、原文とローマ字表記文を比較すると、誤植・不注意による異同の他に意図的に改変された部分も少なくない。日本語の練習が第一目的であるため、学習者にとって文章を分かり易くする必要があったと思われる。より口語的にするために古めかしい言い方や一部の指定表現も変えられたが、後者の変更によってその話し手の個性が失われ

たと考えられる。

上記のように円朝の作品が掲載されたとはいっても、様々な改変が行われた。しかし意訳が付け加えられたこともあったため外国語への翻訳の試みと海外における近代日本文学の紹介としても評価できると考えられる。

多和田葉子『献灯使』論――震災後風景の文学表象

金（キム）　昇淵（スンヨン）（立命館大学大学院博士前期課程）

「東日本大震災」及び「福島第一原子力発電所事故」という現実は、人々の記憶が薄れていく中でも、未だ続いている。震災以降における言説は「核――戦争」のトラウマ的記憶を再び呼び起こし、放射性物質による「汚染」の恐怖として刻印され、「ヒロシマ」「ナガサキ」のような未来像への危機感と「復興」へと固定化されてきた。一方、避難生活を余儀なくされた人々、それを取り巻く事象の根幹へのまなざしはまだ乏しい。「阪神・淡路大震災」における「復興住宅退去」問題を見れば明白であるが、それは単に「被災（者）」と「復興」の物語にとどまらない政治的・社会的問題を内包している。

多和田葉子『献灯使』（講談社、二〇一四・一〇）は、「鎖国」という状況、隠蔽された「沖縄」という空間を通じて、放射性物質による「汚染」から露顕する「戦争――貧困――移民（難民）」などの問題、まさに国民国家の限界を露わにする。そこに描かれる風景は、まさに震災後の避難生活であり、そのディアスポラ的〈移動〉を強いられた人々は「今」もなお帰る場所を持たない。それは「震災」のみならぬ、イスラム国（IS）の出現やイギリスのEU離脱などの現象を抱えている今日の日本、ひいては国際社会における主要なテーマにほかならない。従来の読みは、その不可視な国民国家の「境界線」を規定し――それを単に国境と重ねるのであれば、それこそ国民国家構造の再生産にすぎないにもかかわらず――、多和田の作品における主人公たちがその「境界線」を越えるという「越境」を希求してきた。

本発表では、先ず、『献灯使』を介し、「震災」――とりわけ地震・津波といった「自然災害」よる「被災（者）」を作り出す言説――にとどまらない震災後風景の文学表象について考察する。その上、多和田本人やその作品に顕著であ

る〈移動〉の問題が、震災以降の読みにおいてどのように捉えなおされ、読み直されるかを明らかにしたい。

恋愛と女同士の友情

SANGA Luciana（サンガ ルチアナ）（早稲田大学研究員、スタンフォード大学博士課程）

唯川恵の直木賞受賞作品『肩ごしの恋人』（2001年）は「驚きに満ちた新しい恋愛小説」として発売当時に帯で宣伝された。この小説では二人の女性の主人公は様々な恋愛体験をした末に異性愛をあきらめ、一緒に暮らすことにする。この作品では、女の友情は異性愛に勝ると言っている。女同士の友情の重視はこの恋愛小説の斬新な側面であり、少女小説の伝統から受け継がれたテーマでもある。

本稿では恋愛小説である『肩ごしの恋人』と少女小説というジャンルとの関連を考察したい。唯川恵自身も少女向けのコバルト雑誌にデビューし、80年代には少女小説の書き手として知られていた。唯川恵の少女小説では主人公の少女は他の少女と強い絆で結ばれていることが多い。そしてハンサムな男子に憧れても、結局恋愛より友情が必要だと気づき、異性愛を延期することになる。

女同士の友情は戦前の少女小説から80年代のコバルト小説まで形を変えながらも追求されてきたテーマだ。この意味では『肩越しの恋人』も一種の大人むけの少女小説としても読める。登場人物は大人の女性だが、彼女たちの行動と価値観は少女の価値観と類似し、大人の社会から逸脱しながらも、女性の新しい生き方の可能性を提案している。少女小説のテーマである女同士の友情を恋愛小説に取り入れることによって、恋愛結婚の神話、そしていわゆるロマンチック・ラブ・イデオロギーが唯川恵の小説の中で解体されていく。

『肩ごしの恋人』を事例として取り上げ、現代日本文学における恋愛小説というジャンルの特徴そして恋愛小説に提示されている恋愛の概念について考察したい。更に無視されがちな少女小説が現代の日本文学にどのような影響を与えてきたかということも考えていきたい。

ポスターセッション題目

シアトル美術館蔵『源氏絵巻物』についての諸検討

――初期の土佐派源氏絵巻――

KUHN Michelle（名古屋大学特任講師）

平安文学における「観相」受容の可能性

――『源氏物語』と『浜松中納言物語』を中心に――

張　培華（国文学研究資料館博士研究員）

佐久間象山「東洋道徳、西洋芸術」にみる「芸術」について

江﨑　公子（元国立音楽大学准教授）

『西鶴諸国はなし』巻三の六「八畳敷の蓮の葉」における

策彦和尚の落涙についての考察

水上　雄亮（武蔵高等学校中学校専任教諭）

藤原公任と薫物の伝承

――物語古注釈書と薫物秘伝書が伝える王朝の貴顕の香り――

田中　圭子（広島女学院大学客員研究員）

遠藤周作とフランツ・ファノン

神谷　光信（関東学院大学客員研究員）

国宝「銅造薬師如来坐像」光背銘再攷

頼　衍宏（静宜大学副教授）